

体験版

エンジニアありさ、

淫らな三百六十五日

シリーズ1

「私の部屋で、部長に溶かされて」

朝倉 楓

Kaede Asakura

体験版

エンジニアありや、淫らな二日六十五日

シリーズ1

～私の部屋で、部長に溶かされて～ 第三巻（全三巻）

©2025 朝倉 楓 All rights reserved

無断転載・二次利用を禁じます。

この物語のあらすじ

ありさはもう自覚している——佐藤に触れられた瞬間、自分がどれほど深く墮ちているのかを。

恋人との未来を願ったはずの身体は、別の男の熱と快楽で作り変えられてしまつた。

求められれば応え、与えられれば溺れ、逃げ場のない依存と興奮が日常を侵食していく。

快楽と背徳が頂点へ向かう、墮落の第三巻。

本作はフィクションです。登場する企業・団体・人物はすべて架空であり、実在のもとは一切関係ありません。



目次

Day 7	シックスナイン	4
Day 8	挿入	23

Day7 シックスナイン

二〇一三年六月二十二日 木曜日

先週のフェラの夜から、頭の中が龍でいっぱいだった。

あの熱い脈動、喉奥に注がれた濃厚な精液の味……

毎晩、ベッドで指を咥え、唾液を垂らして練習するふりをして、結局、下半身を激しく擦ってしまう。

金曜日の夜、ついに我慢できず、ネット通販でバイブを買った。

佐藤さんのサイズを想像して選んだら、「極太バイブ」って書いてあるやつ。

黒くて、血管みたいな筋が浮き出た、二十センチ超えの怪物。

土曜日に受け取って、箱を開けた瞬間、ドキッとした。

（本当に……これ、佐藤さんみたい……太くて、硬くて……）

その夜、バイブを口に含み、フェラの練習。

ジュポジュポと音を立て、喉まで押し込み、えずきながらも、裏筋を舌で這わせ

る。

「んぐっ……佐藤さん……」

練習のつもりだったのに、興奮が抑えきれず、バイブを膣に滑らせ、Gスポットを押しながら、

「ああっ……イクっ……！」

何度もイッてしまつた。

生理が終わつた今、体は準備万端。

子宮が疼き、愛液が勝手に溢れる。

（今日こそ……佐藤さんの龍を、私の中に……）

待望の木曜日。

インターほんが鳴つた瞬間、私は玄関に駆け寄つた。

ドアを開け、佐藤さんに抱きつく。

「佐藤さん……待つてました……」

佐藤さんは優しく私の腰を抱き返し、

「白沢さん……僕も。この一週間、君の口の感触が忘れられなくて……」

耳元で囁かれ、膝が震える。

リビングの照明を暖色最弱に落とし、いつもの深いキス。

舌が絡み、唾液が混じり、息が熱く溶け合う。

「んちゅ……れろ……はあ……佐藤さん……」

佐藤さんは私の耳元で微笑み、

「今日はこれまでのおさらいをしましよう。キス、おっぱい、フェラ……そして、もつと深いところ」

「おさらい……？」

私はドキドキしながら尋ねる。

佐藤さんは優しく私の手を引き、

「まずは、シャワー。一緒に浴びよう」

狭いユニットバスに二人で入る。

温かいお湯が肌を叩き、湯気が視界をぼかす。

佐藤さんの手が私のブラウスを脱がせ、ブラを外し、スカートを落とす。

私は全裸になり、佐藤さんのシャツを脱がせ、パンツを下ろす。龍が、湯気の中でそそり立つ。

佐藤さんはボディソープを手に取り、

「白沢さんのおっぱいに、塗つてあげる」

泡を谷間に垂らし、両手で胸を包み込む。

ヌルヌルとした感触で、上下に動かす。

パイズリ。

「ぎゅっと寄せて……そう、乳首でカリを挟んで」

私は胸を寄せ、龍を谷間に飲み込む。

お湯と泡が混じり、滑りが良すぎて、

「ジュ。ボ……ジュ。ボ……」

卑猥な音がバスクームに響く。

「白沢さん……気持ちいい……本当に上手になりましたね。このヌルヌル感、最高だよ」

佐藤さんの褒め言葉に、胸が熱くなる。

（本当に……褒め上手……私、こんなに嬉しくなっちゃう……）

龍がビクビク脈打ち、佐藤さんの息が荒くなる。

「白沢さん……出るよ……！」

熱い精液が谷間に飛び散り、お湯に混じって流れ落ちる。

私はパイズリでイカせた達成感に、下半身がキュンっと疼いた。

シャワーを浴び終え、佐藤さんは私の体を丁寧に洗う。

「しつかり隅々まで洗ってね。今日は、特別なことをするから」「どういうことかな？」

タオルで拭き合い、ベッドへ。

佐藤さんは私の全裸の体を眺め、

「今日はシックスナインをしましよう。お互いが同時に、気持ちよくなれる体位だよ」

シックスナイン……聞いたことはあるけど、実際にやるのは初めて。

佐藤さんはベッドに仰向けになり、私を誘導する。

「僕の上に、逆さまになつて。膝を曲げて、腰を少し浮かせて……顔が僕のアソコに近づくように」

私は佐藤さんの上に跨がり、膝を曲げ、腰を浮かせて体を反転させる。

私の顔が、佐藤さんの龍に近づき、佐藤さんの顔が、私の秘部に埋まる。

お互いの息が、敏感な部分にかかるだけで、ビクッと震える。

「まずは、位置を合わせて……リラックスして。僕が君のクリトリスを舐めるから、君は僕の裏筋を舌でなぞって」

佐藤さんの舌が、私のクリトリスに触れた瞬間、

「ああっ……！」

電流が走る。

佐藤さんはクリトリスを優しく吸い、舌で円を描くように転がす。

「白沢さん……甘いよ。もつと感じて……僕の動きに合わせて、君も動いて」

私は龍の裏筋に舌を這わせ、根元からカリの裏側まで、ねつとりと舐め上げる。

「んっ……ジユル……」

佐藤さんの腰がビクンと跳ね、

「そう……そこ、いい……同時に感じ合おう」

佐藤さんの舌が、クリトリスから膣口へ移り、小陰唇を優しく開き、舌先で入り口をチロチロと刺激する。

（続きは本編で・・・）